

## 第 43 回国立大学法人動物実験施設協議会総会の参加報告

医学系部門生命科学実験班 畠山 照彦

### 1. はじめに（目的等）

国立大学法人動物実験施設協議会は、大学等における動物実験の精度と水準の向上を図るとともに、適正な動物実験の実施を推進し、医学・薬学・生物学等生命科学における教育及び研究の推進に寄与することを目的としている。本総会は、年に一度開催され、会員校関係者（施設長・専任教員・事務職員・技術職員）が集まり、サテライトミーティングや懇談会を通じて情報収集・意見交換を行うとともに、総会において様々な審議を行う場である。今回、私は『新技術・ゲノム編集と発生工学支援の現状について』というテーマで行われた技術職員懇談会において、『広島大学霞動物実験施設における現状について』、というタイトルで口頭発表を行った。

### 2. 期間・場所

期間：平成 29 年 5 月 18 日（木）～ 5 月 19 日（金）

場所：サポートホール高松（香川県高松市）

### 3. 参加者等

国立大学法人動物実験施設協議会会員校の施設長・専任教員・事務職員・技術職員等

#### 4. 研修内容

○5月18日（木）18：00 - 20：00 サテライトミーティング

- ・香川大学で生まれた「希少糖」で世界を健康に
- ・実験動物分野における名古屋議定書実施対応について

○5月19日（金）9：00 - 12：00 技術職員懇談会

- ・新技術・ゲノム編集と発生工学支援の現状について

○5月19日（金）13：00 - 17：00 総会。

#### 5. まとめと感想

18日に行われたサテライトミーティングでは、二題の講演があった。一題目は、香川大学が中心となって研究を進めている『希少糖』について、研究の現状紹介があった。自然界には微量しか存在しない D-プシコースなどの希少な糖を詳しく調べ、様々な医薬・健康増進機能を発見したことについて、動物実験などから得られたデータ等が紹介された。二題目は、実験動物分野における名古屋議定書実施対応について紹介があった。実験動物が遺伝資源として対象となった場合、迅速な研究開発へ影響することが懸念されたが、現在、広く普及している実験系においては、対象となる動物は限られるため、動物実験などへの影響はすぐにはないとのことであった。しかし、新規実験動物の開発として、途上国からの動物を入手するときなどは、通常の遺伝資源として ABS（遺伝資源の利用から生じた利益の公平な配分）を対応しなければならないとのことであった。今後の各

大学での対応方法については、早急に検討していく必要があるとのことであった。

19 日の技術者懇談会では、最初に大阪大学の真下 知士准教授による、『動物実験施設におけるゲノム編集技術の活用』について、特別講演があった。その後、5 大学より、ゲノム編集や発生工学支援の現状について発表があった。私自身が依頼業務として行っている『ゲノム編集』という技術について、実際に動物を作製する技術的な部分については理解しているつもりだったが、その原理などについてはほとんど理解していないのが現状であった。今回、この技術職員懇談会に参加することで、研究の最前線で活躍されている方のお話を聞くことができ、さらには他大学における現状も知ることができたため、大変勉強になった。すでにゲノム編集技術を業務に取り入れている大学があれば、これから取り入れる予定の大学もあり、大学間で活発な意見交換や議論が交わされた。本技術について、さらに簡便かつ効率的な方法が次々と開発されているため、これからも本技術の進歩についていけるよう情報収集に努め、様々なニーズに対応できるようにしていきたいと考える。

以上